かんわ　Letter　vol.8　Dec.2014

こんにちは、緩和ケア普及室です。あっという間に今年も終わりですね。11 月の慰霊式を終え、緩和ケア検討会議でも今後の病院のグリーフケアの在り方を検討しているところです。こどもが亡くなるといっても、お腹の赤ちゃん、新生児、事故、自死、病気…と年齢や原因も様々でその受容過程も異なります。これが正解という答えのない中で、各セクション、職種、診療科でも悩むことの多いケアのひとつではないでしょうか。皆様からのご要望を受け、来年２月 26 日にこどもを亡くした親ごさんのケアの第一人者である若林一美先生（立教女学院短期大学学長）をお迎えしての第 19 回小児緩和ケアセミナーを開催することになりました。センターとしてのグリーフケアを考える場になればと思っております。お時間ある方はぜひいらしてくださいね。 さて、８人目の緩和ケアサポートチームのメンバーは、母性・新生児病棟でお子さんを亡くされたご家族のグリーフケアとして行われている「わたぼうしの会」の運営にも関わっていらっしゃる、ポスター作成の得意なこの方です。

母子保健推進室　園田と申します（*^。^*）

母子保健推進室の園田永子と申します。職種は保健師で、こども医療センターで勤務しているのは３人の少数職種です。保健師は、人々がより健康に、あるいは健康を維持して生活が送れるように、個別・集団・地域全体に働きかける「保健」という視点で仕事しています。

母子保健推進室が患者様に直接に関わる緩和ケア場面は、病理解剖結果説明のコーディネートと、周産期にお子さんを亡くされたご家族の会「わたぼうしの会」の運営があります。緩和ケアとしてはご家族の想いを傾聴させていただくことと、想いをお話できるような場面設定に留意しています。また、今年度からセンター職員のみなさまと遺族の方への緩和ケアを共有するために、緩和ケア検討会議で現状をご報告させていただいています。

わたぼうしの会では、参加者は、深い悲しみ、妊娠中や出産後の想い出、きょうだい児の関係、等さまざまなお話があります。亡くなったお子様の自慢話では、「妊娠後期までがんばった」「ママとパパどちらにも似ている両親思いの子」「大事なことをたくさん教えてくれた」等親としてのあふれんばかりの愛情を感じます。

このようなお子さんへの想いについて「ここでしか話せない」という声を多く聞きます。ご親戚から「いつまでも悲しんでいると、亡くなった子が心配するよ」という言葉で傷ついたり、「毎日の生活が忙しく、考える余裕がなく寂しい。」等　日常生活では安心して話す場面がないのが現実です。そのためわたぼうしの会は気持ちを表現する大切な場面になっています。

病理解剖の結果説明や慰霊式で、悲しみや想いを話されるご家族の姿を拝見して、周産期以外で亡くなった方にもこども医療センターとして場を保障する必要性を感じます。現在はグリーフカードをお渡ししていますが、サロン等遺族ケアのできる場面も必要と思います。実際どのように実施するかは課題が山積ですが、現在、緩和ケアチームや検討会議で遺族ケアについて検討しています。メンバーの一人として、職員の叡智でよい方法を作っていきたいです。

緩和ケアサポートチームの園田さんにもお気軽にお声かけくださいね。

お問い合わせ：緩和ケア普及室　柏木順子（PHS5984）